

日本宣教と翻訳

— 1880年代におけるM・C・ハリス監督の翻訳活動を中心に —

Translations for Japanese Mission:
Focus on the Translation Activities of Bishop M.C. Harris in 1880s

李 主 先*

Joosun LEE

キーワード：①M・C・ハリス ②メソジスト監督教会 ③文書宣教
④クリストリーブ ⑤耶蘇教奇跡論

論文要旨

M・C・ハリス (Merriman Colbert Harris) は、メソジスト監督教会の宣教師として1874年に来日し、1886年に帰国するまで、伝道活動と英和学校での教育活動に貢献した。

また、この時期、ハリスは日本の文化と宗教・言語に対する深い理解のもとに日本の諺と代表的排耶論の演説文をはじめ、キリスト教信仰の弁証論と聖書注釈書の翻訳を通じた文書宣教活動を活発に展開した。

本稿では1880年代にハリスが翻訳したテキストを考察し、ハリスの翻訳活動の具体像を明らかにした上で、彼の翻訳活動を文書宣教活動の中で位置づけたい。ハリスの翻訳テキストは19世紀日本で行われた様々な宣教活動の一例を示すものであり、日本文化体験を投影している文化批評であり、当該期西洋人による日本認識を反映している点においても意義が大きい。

* 金城学院大学キリスト教文化研究所客員研究員

はじめに

M・C・ハリス（Merriman Colbert Harris）は、1846年7月9日、オハイオ州ビールスヴィール（Beallsville）に生まれ、12歳の時に受洗し、メソジスト監督教会員となった。1869年のピッツバーグ年会で教職試補として受け入れられ、1873年にアリゲニ（Allegheny）大学を卒業し、同10月にフロラL・ベストと結婚、メソジスト監督教会宣教師として同12月14日に来日した¹。

メソジスト監督教会は、1873年6月にR・S・マクレイ（Robert S.Maclay）をメソジスト監督教会宣教師として初めて横浜に派遣し、東洋伝道視察のため来日したハリス監督（Bishop W.L.Harris）の元で、同8月には日本宣教連回会（The District Conference of the Japan Mission）を組織した。そして日本という連回（District）の中に、横浜、東京、長崎、函館の4つの巡回（Circuit）を定め、I・H・コレル（Irvin H.Corell）を横浜巡回に、J・ソーパー（Julius Soper）を東京巡回に、J・C・デビソン（John C.Davison）を長崎巡回に、M・C・ハリスを函館巡回にそれぞれ任命した²。

ハリスは、翌1874年1月26日に妻と共に函館に赴任、同地に赴任した最初のプロテスタント宣教師となり、函館教会を創立し、1879年11月には札幌にメソジスト監督教会巡回区を確立した。また、W・S・クラーク（William Smith Clark）の感化を受けて入信した内村鑑三と新渡戸稲造をはじめ札幌バンドの生徒15人に洗礼を授けた。1878年に東京の監督職に任命され、東京第二巡回区における伝道事業を担当して芝と麻布で説教礼拝を続けた³。1882年にはアメリカに一時帰国したが、1884年に再来日し、同年の第一回日本年会設立後は東京東部連回の長老司に任命され、同地域の日本人牧師や信者の養成、福音伝道に尽力した⁴。さらに、青山学院大学の前身である東京英和学校の教師として学校のためにも尽くしたとされる⁵。

1886年に帰国したハリスは太平洋沿岸およびハワイの日本人を中心に宣

教活動を行い、1904年に日本朝鮮宣教監督として再び来日した。1907年のメソジスト三派合同には本多庸一とともに貢献し、1916年退職するまで日本と朝鮮の宣教監督として働き、1921年に青山学院大学のハリス館で死去した⁶。

ハリスは1898年7月と1905年1月、1916年3月に「常ニ帝国ニ対シ好意」を有し、帝国のために尽力した功労が評価され、明治政府から其々勲四等・勲三等・勲二等瑞宝章の叙勲を受けた。これらの叙勲は、アメリカの太平洋沿岸とハワイで日本人宣教に当たり、朋友として日本人と日本国を弁護したこと、日露戦争の際にアメリカの太平洋沿岸各地において「帝国ノ正義公道」を説明することに努力したこと、10年以上にわたり朝鮮の教化に務め「内地人朝鮮人間感情の融和」を図り、日本の朝鮮統治の実績を称揚してアメリカ人に周知させた功績が明治政府から評価されたためである⁷。さらに、ハリスの死後5年後の1926年にはハリスを記念して日本メソジスト鎌倉教会が建てられた⁸。

ハリスの華麗なる経歴にも関わらず日本におけるハリス研究は、一次資料の乏しさゆえに、函館教会の創立過程やアメリカメソジスト監督教会の日本宣教活動の中でその生涯が簡略に紹介されているにすぎない⁹。

一方、アメリカでは二世アメリカ人レスター・E・スズキ (Lester E. Suzuki) が書いたハリスの伝記がある。

ハリスの出生と家族関係をはじめ、南北戦争への参戦過程や太平洋沿岸における在留邦人宣教活動、1907年以降のメソジスト三派合同運動におけるハリスの役割を詳しく述べている包括的研究である¹⁰。近年、ホンミンギはスズキの研究成果を継承しながら韓国側の史料を十分活用し、スズキ研究で乏しかったハリスの韓国宣教政策や親日活動を実証的に考察し、親日派宣教師としての否定的な評価を再検討した¹¹。

ハリス研究の大きな進展にも関わらず、東京の監督職として任命され、東京に移り住んだ1880年代におけるハリスの翻訳活動については研究史上

において注目されてこなかった。

この時期ハリスは、東京地域の伝道活動や英和学校での教育活動とともに、日本の文化と宗教・言語に対する深い理解をもとに日本の諺と代表的排耶論の演説文をはじめ、キリスト教信仰の弁証論と聖書注釈書の翻訳を通じた文書宣教活動を活発に展開した。

本稿では1880年代にハリスが翻訳したテキストを考察し、ハリスの翻訳活動の具体像を明らかにした上で、彼の翻訳活動を文書宣教活動の中で位置づけたい。ハリスの翻訳テキストは19世紀日本で行われた様々な宣教活動の一例を示すものであり、日本文化体験を投影している文化批評であり、当該期西洋人による日本認識を反映している点においても研究対象として興味深い。

第一章 *The Chrysanthemum* における ‘Japanese Proverbs’

ハリスは1881年から発行された *The Chrysanthemum, A Monthly Magazine for Japan and the Far East* (以下『菊』と表記) という雑誌に多くの翻訳文を投稿している。まず、『菊』という雑誌について触れておきたい。

『菊』は日本と極東アジアの歴史、文学、文化、言語、宗教、思想などに対する批評 (Reviews) と翻訳文 (Translations) 記事を主として掲載する月刊誌であり、1881年1月から1883年6月まで横浜で発行された。東京帝国大学の言語学教授チェンバレン (Basil H. Chamberlain) の古事記の翻訳をはじめ、アーネスト・サトウ (Ernest M. Satow) 書評など、当該期著名な日本学者の学術論文を多く掲載している一方で、日本文化の紹介 (エチケット・諺・お茶の文化など) も行う文芸総合誌的性格の雑誌であった。日本と極東アジアを研究対象とするが実際には日本関連記事の比重が最も大きく、コスモポリタニズムを志向している進歩的傾向の雑誌である¹²。

『菊』の編集者は、カナダメソジスト宣教師チャールズ・エビー (C.S. Eby) だったが、記事の多くは寄稿者 (Contributors) による寄稿記事で占めら

れていた。『菊』の寄稿者には二つの大きな特徴がある。一つ目は、チェンバレン、アーネスト・サトウを初め、D.Brauns, J.M.Dixon, Thomas Gray, J. Milneなど、「日本アジア協会」(The Asiatic Society of Japan) 会員として年1回発行される『日本アジア協会会報』(Transactions of the Asiatic Society of Japan) に掲載される学術論文の主な著者でもあった¹³。

二つ目は、超教派的な宣教師グループの寄稿が目立つ。米国長老派教会 D.Thompson, W.Imbrie^{*}, ダッチリフォーム派 G.F.Verbeck^{*}, アメリカンボード J.C.Berry^{*}, John.T.Gulick, スコットランド長老派 H.Waddell, メソジスト監督教会 M.C.Harris, カナダメソジスト教会 C.S.Eby, G.M. Meacham^{*}, アメリカンバプテスト同盟 N.Brown^{*} 宣教師などが『菊』に記事を寄せている¹⁴。

これらの特徴から『菊』は「日本アジア協会」の一部のメンバーと居留地在駐宣教師グループを中心として発刊された雑誌として推測できる。しかし、「日本アジア協会」が専門的学術雑誌であったのに対して、『菊』は宣教師中心の寄稿文を多く掲載した、専門性が低い文芸総合誌的性格が強かった。1883年から専門的学術雑誌をめざすため、雑誌の構成とサイズを変えて、*The Chrysanthemum and Phoenix A Monthly Magazine for Japan and the Far East* というタイトルで新たにスタートさせた。それに伴い雑誌の値段も上げたがこの試みはうまくいかなかったのか、1883年6月以降に雑誌が発行された痕跡はない¹⁵。

以上のことから、恐らく読者層は日本在留欧米人、特に寄稿者の多くの比重を占めていた宣教師たちであったと推測でき、日本宣教のための日本学の総合的・基礎的知識を提供し、情報を共有する役割を果たしていたと考えられる。

ハリスは1881年2・3・6・9月号の4回わたって‘Japanese Proverbs’というタイトルで日本の諺を翻訳し連載している。2月号では30個、3月号では28個、6月号では32個、計90個の諺を、一連番号をつけて連載し、9月号のみ

番号付けなしで23個を載せている。

ハリスは、日本の諺の起源の多くが中国由来のものであり一部はインド由来であるが、日本語と完全に融合しているため、容易に古来の諺との区別できないと分析しながら、面白くかつ有益なもので感動を受けた諺を選択し、可能なかぎり日本の諺に対応する英語表見を記載している。ハリスの連載でみられる諺くらべの事例をいくつか紹介する¹⁶。

2. —*Tama migakazareba, hikari nashi.* (筆者注—玉磨かざれば光なし)

If you do not polish a jewel it will not glisten.

Compare this with, — “Practise not your art and ’twill soon depart,” or, — “The used key is always bright.”

25. —*Ningen banji Saiwo ga uma.* (筆者注—人間万事塞翁が馬)

Men, (as regards) all matters are like Saiwo and his horse;

.Or, “Calamities may be blessings in disguise.” The story on which this proverb is founded, runs as follows. In ancient times there lived in the north of China an old man named Saiwo. It happened that he lost his horse, whereupon his neighbours expressed their sorrow. But the old man shook his head and said he was not sure whether it was a misfortune or not. In a short time after this the lost animal returned in company with another first-class horse, and his friends all rejoiced over his good fortune (fortuneか—筆者注). The old man addressing them said, — “I am not sure but that this will prove to be a misfortune.” Shortly after this his son who was very fond of riding, fell and broke his arm. To the surprise of every one the old man remarked that this would likely turn out to be a blessing. Soon afterwards a war broke out and all the able-bodied men were taken for military duty, but the old man’s son, on account of his injury, was passed by, and left to comfort and care for his father.

諺翻訳の特徴は、多くは直訳と意識を併記している。意識の場合、対応する諺以外に聖書の聖句、シェイクスピアの名言、論語などからの引用が

多くみられる。また、No25の事例のように、文化的差異によって諺だけでは意味が十分に伝わらない場合は、由来やエピソードの補足的説明を加え、日本の諺の意味を充実に翻訳している点も先駆的である。

さらに、いくつかの諺翻訳には自身の意見も付け加えられており、ハリスの日本観を垣間見ることができる。たとえば、47.*Koshō maru nomi*. (筆者注一胡椒丸呑み)についても直訳に加え、物事の本質を正しく調べると真の意味を理解できると意識しながら、日本人は自分の子供に対する過剰な愛情によって時々悪い結果をもたらすことで有名であると書き加えている。

また、55.*Kairō dō-ketsu no chigiri*. (筆者注一偕老同穴の契り)について「夫婦が生と死においてともに結ばれること」として意識しながら、以前の日本では、侍の妻は夫に死なれた後にも、ほとんど再婚することなく、夫への貞節を守るが、逆に妻に死なれた夫は生涯何度再婚しても社会の礼儀に反することはないとし、夫婦における貞節義務は妻のみを縛るものであると指摘する。

諺は各々の言語文化圏の信念、世界観、価値などを多く含んでいる側面から考えると、ハリスの諺翻訳はテキスト翻訳に留まらず日本文化そのものの翻訳であろう。そして彼の日本文化と言語に対する広範な知識と深い理解力が諺翻訳の土台となっていることは言うまでもない。

日本の諺に関する記述は、ヘボン (J.C.Hepburn) によって1872年編纂された『和英語林集成』の第二版から取り入れられているが、直訳のみである¹⁷。恐らく日本の諺に対してそれに対応する英語の諺を併記した日英諺比べ形式は最初の試みだったのではないか。ハリスの日本の諺翻訳と日英諺比較の試みは、日本文化理解者の底辺を拡大し、日本人向けの説教で用いる有効な諺を広める、という動機もあったかも知れない。

ハリスは日本の言語・文化のみならず、キリスト教信仰の広がりの中で、日本社会のキリスト教認識の形成に影響を及ぼした反キリスト教論に対し

でも強い関心を示し、代表的排耶論を翻訳・紹介した。第二章ではハリスの排耶論のテキスト翻訳について検討を加える。

第二章 宗教演説の翻訳

ハリスは『菊』の1881年10月号に‘Japanese Lectures’というタイトルで当該期日本に繰り広げられていた二つの排耶論演説文の翻訳を掲載している¹⁸。

一つ目は福沢諭吉の「宗教の説」であり、二つ目は斎藤吾一郎の『耶蘇教国害論』である。

「宗教の説」は一文一文を忠実に翻訳しているのに対し、『耶蘇教国害論』については分量の問題からなのか抄訳している。

まず、1880（明治13）年の夏頃に東京の三田で行われた福沢諭吉の「宗教の説」という演説を検討する¹⁹。

福沢諭吉はこの演説のなかで、政府は法律を以て人を治めるのに対し、宗教は人の心を支配するものであると宗教と政府の関係を位置づけた。その上で宗教を「現時の行實を以て未来の幸福を祈る」ものと定義し、生きている間の幸福を祈る神道は日本の宗教ではないという神道非宗教論の立場を取った。そして仏教こそ千年間日本の人心を支配してきた日本の宗教であるゆえ、自分自身が仏教の「援兵の一人」であることを強調し、政府と学者が援兵となり耶蘇教から「坊主の領分」を守るべきだと主張した。

このような主張の背景には、キリスト教信者の増加とキリスト教の蔓延により「国権の拡張」に障害をもたらすという危機意識があった。漢学者の中国文化に対する鼻屑が日本の支那に対する国権の拡張に妨げになるように、日本人がキリスト教者となれば、西洋に対する鼻屑の心が起こり、競争世界において西洋との戦いや国権の拡張に妨げになることを杞憂したのであった。

国権論的立場における福沢の排耶論は『文明論之概略』や「時事小言」

にも見られ、福沢の国体概念の形成過程に影響を及ぼした²⁰。

一方、『耶蘇教国害論』は、キリスト教説教会に反対して6月に京都に開催された大規模な仏教演説会で行われた演説であったが²¹、その後演説原稿は異なる出版元によって多く刊行されて販売ないし配布されたとみられる²²。1881年の初版発行以来、『耶蘇教之無道理』と並んで、キリスト教論駁の典拠書として大量に配布され、庶民教化に用いられた²³。

『耶蘇教国害論』の著者は、大阪府平民の斎藤吾一郎である。斎藤は自らを「坊主でもなく神主でもなし、もとよりいずれの宗教にも偏らずまたいずれの宗教の善なるを知らざるもの」としながら、この耶蘇教に限ってよくない宗教であることを知っているの、「わが国を愛する丹心からここに論ぜねばならぬ」と冒頭に述べている²⁴。

さらに、外教盲信者の迷夢を驚かし、政治家の注意を喚起することが著述の目的であると述べている。

斎藤によれば、耶蘇教は「残忍暴虐の悪徳と国をかすめ地を奪う詭術」であり、これこそ他の宗教と異なる恐るべき二つの性質があるという。12世紀の十字軍運動、16世紀の宗教改革やヨーロッパにおける新旧教の対立等による戦争と戦死者数を具体的に列挙しながら、キリスト教を残忍暴虐な宗教として批判する。また、江戸時代のキリスト教禁教策、島原天草の乱、イギリスのインド統治などの事例を挙げ、耶蘇教伝道が植民地化の「手先」であるとの認識を示した。すなわち、国を奪うためには、まずは耶蘇教を広め、その国の固有の宗教と国情を奪い、民心を支配したのち最終的に兵力を用いる。そのため、日本人として耶蘇教の「弘通」に周旋するものは「国を売の奸賊」、宣教師の奴隷である。耶蘇教を信じる日本人は日本と西洋との戦いでも西洋人を助け、国を裏切ることになる。愛国の精神あるものはこれを任放することなく、国の大害になる恐るべき耶蘇教を退却し撲滅することが国の「先務」であると呼びかける²⁵。以上が斎藤の排耶論の骨子である。

福沢と斎藤のキリスト教認識は、「恰も火の野原を燎く如き勢い」（斎藤）、「所々に教堂を開き、追々信者が増加する」（福沢）現状に対し、国権の維持・拡張という立場からキリスト教の蔓延を警戒している点でおおむね一致している。この『耶蘇教国害論』は福沢の主唱のもとに「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」ことを目的として1880年に結成された交詢社員の演説会でも配布されており²⁶、仏教演説会に限らず、知識人層にも幅広く配布され排耶論が展開されていたことがわかる。

1873年にキリスト教禁制の高札が撤去され、伝道活動が黙認されるようになり、1880年代は日本の教会が成長した時代でもあった反面、それへの反感が高まった時代でもあった²⁷。

特に、仏教界の危機意識は強く1881年ごろには仏教演説会や講談会において直接的な暴力行使や排耶書の配布等を含む様々な反キリスト教運動が全国各地でおこなわれていた²⁸。

これらを踏まえれば、キリスト教成長に伴う仏教界や知識人の大規模な排耶論の展開は、伝道の担い手であった宣教師たちに突きつけられた大きな課題であったことは容易に想像できる。

ハリスが当時の代表的排耶論を翻訳・紹介したことは、彼の関心の強さを示すものであり、彼ら宣教師たちにとって宗教界や知識人層による反キリスト教世論の動向を的確に把握して日本宣教の方向性を考えることが求められていたといえる。

なお、『耶蘇教国害論』とならんで当時広く流布した排耶書であった『耶蘇教之無道理』についても言及しておきたい。

『耶蘇教之無道理』は、仏教界でもっとも反キリスト教活動に力を入れていた真宗大谷派の僧侶、藤島了穩によって書かれ、1881年6月から出版した小冊子3篇から構成されるものである。第一編は天地創造説を、第二編で原罪説、第三編でノアの洪水説を取り上げ全知全能の神が存在するからには、人を害する動物、悪心、産褥の苦しみ、農耕の労、洪水の災厄な

ど、不都合なことがあるのは無道理であると主張する。仏教演説会の時に聴衆に配布し、そのほか諸方に頒布した結果、1882年の初め頃までに配布七十万部に達したという²⁹。

『耶蘇教国害論』は、切支丹以来の邪教観を背景にしつつも、おもに国権論的立場からキリスト教を批判したのに対し、『耶蘇教之無道理』は部分的であるが聖書の内容に言及し、理性と合理的思考という側面から創造論やノアの洪水説の残忍な側面を批判した。

1880年代初頭におけるこれらの排耶論についてキリスト教側でも看過しえず、横井時雄は『真教弁明』となる弁駁の書を著わし、『七一雑報』も信徒向けの批判を掲げて、聖書は上帝の顕現と黙示によるものであるから、最初から己の所見をもって書中のことを疑うことはなかれ、と戒めた³⁰。

このような状況下で代表的排耶論の演説を翻訳・紹介した宣教師ハリスは、キリスト教信仰の弁証に対する高い関心と使命感を持ったと考えられる。ハリスは、「宗教の説」と『耶蘇教国害論』を翻訳した翌年の1882（明治15年）に、19世紀の最も著名なキリスト教弁証書であった³¹、クリストリーブ（Theodor. Christlieb）の著書 *Modern doubt and Christian belief: a series of apologetic lectures addressed to earnest seekers after truth* の一部を『耶蘇教奇跡論』として翻訳出版した³²。これは、日本社会にひろがりつつある排耶論に対するハリスの聖書的・神学的弁明であったと考える。

また、ハリスは帰国する前後に新約聖書注釈書の翻訳活動や出版にも携わっていた。

次章では『耶蘇教奇跡論』とハリスが関わった新約聖書注釈書の検討を通じて、ハリスの翻訳活動の宣教的意義を解明する。

第三章 『耶蘇教奇跡論』と新約聖書の注釈書

第一節 『耶蘇教奇跡論』

第一節では、クリストリーブの執筆の経緯と意図を述べ、ハリスが翻訳

出版した『耶蘇教奇跡論』の内容を簡単に紹介した上で、ハリスの翻訳の意図を明らかにする。

クリストリーブは1833年ドイツ南部のヴェルテンベルク王国 (the Kingdom of Wurttemberg) のビルケンフェルト (Birkenfeld) で牧師の息子として生まれた。チュービンゲン大学 (university of Tübingen) 卒業後は、ロンドンのイズリントンにおけるドイツ人教会のため、数年間イギリスに滞在していた。その間、ロンドンのドイツ知識人を対象に、キリスト教批判に対する弁解のために講演を行っており、同著書 *Modern doubt and Christian belief* は、1863年から1864年の冬に行われた講演内容が元となっている。同著は、1870年ドイツ語の2版が出版された翌年の1871年に英語に翻訳され、その後英語版は五版まで版を重ねて出版された³³。

本書の目的は、ドイツの伝統神学の影響力を拡大し、他国の神学生やクリスチャンたちにキリスト教批判や攻撃を退ける有用な方法論を提示することにあった。特に彼はキリスト教の信仰と真理に対する近代的懐疑の主な根源を形而上学 (metaphysical philosophy)、高等批判 (historical criticism)、自然科学 (natural science) と分析した。そして、本の前半部 (レクチャ1-5) では形而上学と聖書に焦点を絞り、近代理性主義に基づく神学の非聖書的概念や奇跡の否定に対する弁証論を展開し、後半部 (レクチャ6-8) では、聖書の高等批判 (historical criticism) に対して、神の神性 (The Divine Nature) に基づく聖書の観点からキリスト教信仰の弁証論を展開している³⁴。

すなわち、クリストリーブの著書の目的は、近代科学の発達が発した理性主義・合理主義に基づくキリスト教信仰の否定、聖書が歴史や科学と矛盾する内容を含んでいるという高等批判から神の存在を証明し、キリスト教信仰を防御するためであった。

前述したように英語版は8つのレクチャで構成されている分厚い本であるが、ハリスはレクチャ5のみを簡明に要約し、日本語に翻訳した。

〈表1〉

	クリストリーブ	ハリス
タイトル	THE MODERN NEGATION OF MIRACLES	耶蘇教奇跡論
目次 (目録)	I NATURE AND POSSIBILITY OF MIRACLES,	第一章 奇跡ヲ拒絶スル事ヲ論ス 第一条 奇跡ノ性質ト其能クス可キ事 第二条 奇跡ノ必用ナル事及ヒ歴史上ノ顯著ナル事
	II NECESSITY AND HISTORICAL MANIFESTATIONS OF THE MIRACULOUS,	第二章 奇跡ノ制限ヲ論ス 第三章 奇跡ハ神ノ人ニ施ス権理ヲ定ムル事ヲ論ス 第四章 基督ハ奇跡ノ開進中其中心ニ位スル事ヲ論ス
	III ARE MIRACULOUS MANIFESTATIONS STILL VOUCHSAFED?	

〈表1〉で示すように、ハリスはクリストリーブの‘II NECESSITY AND HISTORICAL MANIFESTATIONS OF THE MIRACULOUS’部分を2・3・4章に分けて構成し抄訳した。さらに、原文の‘III ARE MIRACULOUS MANIFESTATIONS STILL VOUCHSAFED’は全文省略されている³⁵。

ハリスが翻訳した『耶蘇教奇跡論』の内容を簡単に要約すると以下のとおりである³⁶。

第一章では、キリスト教の奇跡を否定することへの反論、奇跡の性質(Nature)と必用性について述べる。

奇跡をキリスト教の根源として捉え、聖書の奇跡を否定するときキリスト教は成り立たないと主張する。キリスト教は単なる道徳上の真理や教訓ではなく、人性と神性を具有するキリストが全世界を救贖したという歴史上の事実であり、その事実こそキリスト教の本質であり奇跡である。そして、旧約・新約のすべての奇跡は聖霊によって「孕マレシ」より、復活して昇天するにいたるキリストの生涯の行為に関係するものであり、その教えを諭すもの及び旧約の律法、預言も真の神の黙示であり奇跡である。

また、奇跡の性質は天地間に自由に働く神の能力を現すものとして、「新

奇の事を致し、或いは之を創造する動作」であり、このような奇跡が「必用」なるのは、この世を創造したる神の「大眼目」であり、「罪惡に深染して汚濁なる」世界を神の公義と慈悲によって「清浄」するためである。

第二章では、奇跡の制限すなわち奇跡が及ぶ領域・範囲について説明する。奇跡は道徳上および、「教法上の行為」である信仰生活に相関するものとして、神が天地を統治し守護する所以を含むものである。奇跡と神の黙示は相互に分離できない。そのため、神から選ばれたユダヤ人に「聖旨」を示す種々の奇跡を証拠として神の黙示を顕わし、その奇跡はモーセおよび預言者の時代、キリストの時代にも顕われた。また、自然法により神の黙示を人に付与することができないために神は奇跡を用いる。そしてノアの洪水、ソドムの滅亡以来今日に至るまでのすべての奇跡は、神の審判上における完全な公義を示すためであり、ユダヤ人をエジプトから救いだし「医治」してくださる恵みによる奇跡は、神が人間を深く愛していることを明確に示すためであり、キリストの救贖の目的は人を「養成」することにあると述べている。

第三章では、奇跡とキリスト教の教えの関係について論じている。キリスト自身が神の子としてこの世に使われたことを以て奇跡を人々に現したように、奇跡はそれを行うものが神から使われたことを顕わし、彼らの証言を「堅固不拔」にする目的を持っている。そのため、奇跡に関わる証拠は奇跡それ自体ではなく、キリストの教えの全精神と意味とを合わせてなお確固たる証拠となる。したがって、使徒たちによる奇跡はキリストの教えに附属するものであるとする。

第四章では、すべての奇跡は神の救いの目的を達成するに効益あるものとして、神の本性である愛によってキリストは「人々を罪の境界より靈魂の生命を救い」、「復生」してこの世を清浄させる基礎となったこと、愛である神の本性がキリストによって現われた「復生」こそ最も広大なる奇跡であり、歴史上の奇跡の「開進の midpoint」にキリストがあると弁証した。

すなわち、クリストリーブは、キリストの受難と復活は、愛の本性を持っている神の全世界を救贖した歴史上の事実であること、神はその目的を達成するための手段として黙示を行い、神からの黙示を堅固にするために奇跡を用いるのだ、とする。それゆえ奇跡の事実を否定することは、神が人間に付与した黙示を否定することとなり、一方聖書における神の黙示と神の「唯一」なることを証明することは、等しく奇跡の証拠となると結論づけた。

クリストリーブは合理的・理性的思考と矛盾すると捉えられているキリスト教の奇跡の問題を、聖書的観点から弁証しキリスト教信仰を弁護したのである。

そして、ハリスは日本におけるキリスト教の布教と土着化の過程で直面した排耶論に対して、クリストリーブの著書を翻訳し、広範囲の読者を対象としてキリスト教信仰を弁証しようとする意図があったと思われる。

すなわち江戸時代以来の伝統的邪教観に基づく『耶蘇教国害論』や理性主義に基づいて全知全能の神の存在を否定する『耶蘇教之無道理』で象徴される排耶論に対して、同時代の欧米社会でキリスト教弁証論を展開していたクリストリーブの著書の一部を翻訳出版し、聖書的観点からキリスト教信仰を弁証しようと試みたのではないか。

第二節 新約聖書の注釈書

『耶蘇教奇跡論』に続き、1887年にはハリスが翻訳したアメリカの神学者ダニエル・デー・ホイデン (D.D.WHEDON) の『馬太伝福音書義解』(Commentary on THE GOSPELS: Intended for popular use MATTHEW. Vol.1) が出版された。これは、メソジスト神学によるマタイ伝の注釈である³⁷。

また、同1887年ハリスの口授したものを主にして『新約全書約翰黙示録註釈』が分冊の形で出版された。

本書はハリスの講義もしくは説教を聞いた尾原英吉・河村天授などのメソジスト教会の教友の主導によって、ハリスの口授を主にして神学者たち

の注釈を抜抄して編纂したものである。

「公明正大」で偏らない注釈書にするため、同メソジスト監督教会の宣教師であったマクレイ (Robert S. Maclay)、コレル (Irvin H. Corell)、ソーパー (Julius Soper) が正し、さらに南小柿洲吾と山田虎之助の校閲を経て出版された。ただし、最初から本文を全刷する形をとらず、196ページ分を、第1号から第5号までに約40ページずつ分冊出版した。元よりこの注釈書は、巻頭に総論及分析、読者の注意など80ページを含む800余りの全刷を意図し、その段階として分刷の形を取っていたと見られるが、第6号が出版された痕跡はなく何等かの事情で編纂が中止になったと考えられる³⁸。

マタイ伝注釈書の翻訳や黙示録口授がなされた時期は、ハリスが東京東部連回の長老司として同地域の伝道活動を続けながら東京英和学校の教育に携わった時期でもある。そのため、黙示録の註釈はこの時期ハリスの説教又は講義の記録と考えられる。なお、ハリスは1886年に帰国しているので、1886年までの翻訳記録もしくは口授の記録をもとに1887年に出版が行われたとみられる。

ところが、聖書そのものがキリスト教信仰の最も権威ある自己弁証書であり、これらの聖書注釈書もキリスト教信仰の弁証書であったことは言うまでもない。ハリスが翻訳した『馬太伝福音書義解』の冒頭の総論は、聖書を神の「託宣」によって書かれたもの、神の「感通」を受けたる教会と教会の会長である耶蘇と「造化主」たる神の「教法上の真理及び教義の論述及び蘊奥の記録」として位置づけている。すなわち、「無謬正確」で疑うべきではないという聖書の完全性が、神とキリスト教理解の前提となっている。

ハリスには、これらの註釈書の翻訳・講義活動を通じてメソジスト神学に基づいて聖書の内容を正確に日本人に伝えるという意図があったと考えられる。読者たちの聖書理解を助ける聖書注釈書の普及がキリスト教布教の最も有効な手段であることは論を俟たない。

したがって『耶蘇教奇跡論』に加えてマタイ伝の注釈書翻訳と黙示録の口授記録の出版は、1880年代に展開された排耶論に対するキリスト教信仰の弁証とキリスト教伝道を目指したハリスの中心的な文書宣教活動として位置づけることができる。

終わりに

本稿は1880代に行われたハリスの多様な翻訳活動を分析し、ハリスの文書宣教活動の具体像を明らかにした。

ハリスは1881年には横浜で発行された雑誌『菊』に‘Japanese Proverbs’というタイトルで四回にわたって日本の諺などを英訳し、それに対応する西洋の諺や聖書の聖句、シェイクスピアの名言等を紹介している。ハリスの日本の諺翻訳と英語諺の併記は、日英諺比べという側面においておそらく日本での最初の試みであったと思われる。宣教師ハリスの言語学習力をはじめ、日本文化に対する深い理解を読み取ることができると同時に、当該期西洋人の日本認識を垣間見ることができる貴重な資料である。日本におけるキリスト教伝道と土着化を進める上で言語を始め、日本文化全般への理解は宣教師たちの宣教活動の一部であることは言うまでもない。

また、同時期に‘Japanese Lectures’というタイトルで当該期の代表的知識人であった福沢諭吉の「宗教の説」と、多くの仏教徒の間に流通された代表的キリスト教排斥論である『耶蘇教国害論』を翻訳・紹介した。これらは1880年代におけるキリスト教の成長を国家的脅威として認識し、既存の伝統的な邪教観と国権論的立場から耶蘇教批判を展開していたもので、当該期民衆のキリスト教観の形成に大きく影響を及ぼしたものである。これらを翻訳・紹介したことは、ハリスの排耶論に対する高い関心を示すものであり、それが翌年の1882年にクリストリーブの *Modern Doubt and Christian Belief* の一部を『耶蘇教奇跡論』として翻訳出版した契機となった。すなわち、ハリスは日本社会に広まっている排耶論に対して『耶蘇教

奇跡論』を翻訳出版し、神学的・聖書の観点からキリスト教信仰を弁証しようとする意図があった。

さらに、ハリスが帰国した翌年の1887年には彼が翻訳したホイデンの『馬太伝福音書義解』とハリスの口授を元にした『新約全書約翰黙示録註釈』(未完)が出版された。『馬太伝福音書義解』の翻訳と『新約全書約翰黙示録註釈』(未完)の出版活動は、メソジスト神学による新約聖書注釈書の普及という側面で、神学校教育と教会史においてその意義が大きいが、一般読者の聖書理解を助けることにも繋がり、キリスト教信仰の弁証と布教という側面においても大きな貢献であろう。

註

- 1 J・W・クランメル著・板垣哲子訳『米国メソヂスト監督教会等の明治初年における東京の伝道——一八七三年から一九〇七年まで——』銀座教会九十年史資料、日本基督教団銀座教会、1982年、46-49頁。
- 2 澤田泰紳著・土肥昭夫編『日本メソヂスト教会史研究』日本キリスト教団出版局、2006年、10項。
- 3 註1に同じ。『キリスト教人名辞典』日本キリスト教団出版局、1986年、1129頁。鳥典英「M・C・ハリス監督をめぐって」『キリスト教史学』第54集、2000年7月号、23頁。
- 4 홍민기「해리스 감독의 생애와 선교에 관한 연구」감리교신학대학교 대학원、2009年、47-60頁。
- 5 福島恒雄『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局、1982年、150-151頁。
- 6 前掲『キリスト教人名辞典』1129頁。
- 7 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A10112822500「米国僧正勲三等エム、シー、ハリス叙勲ノ件」(国立公文書館)。1898年勲四等瑞宝章の叙勲に関する記録は『護教』第六百八十号、明治三十七年八月六日「ハリス博士の来朝」記事参照。
- 8 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B04012582500「本邦ニ於ケル教会関係雑件9.本邦人経営ノ教会」(外務省外交史料館)。
- 9 日本基督教団函館教会編『日本基督教団函館教会100年史』1976年、3-8頁。山

- 鹿旗之進『合同メソヂスト教会小誌』近代日本キリスト教名著選集第14巻, 日本図書センター, 2003年, 1-21頁。
- 10 Lester E.Suzuki, *Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*, 発行年代未詳。
- 11 홍민기 「해리스 감독의 생애와 선교에 관한 연구」 감리교신학대학교 대학원, 2009年。
- 12 *The Chrysanthemum, A Monthly Magazine for Japan and the Far East, Volume I and II*, Yokohama: Kelly & Co, 1881-2, 同志社大学図書館所蔵。同雑誌については殆ど情報がないが⁸, 1881年1月号(創刊号)に掲載されている‘Introductory Address’が参考となる。
- 13 *Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol.IX*, Yokohama: R.Meiklejohn and Company, 1881, 同雑誌の巻末に掲載されている会員名簿を参考にした。
- 14 ※は『菊』の寄稿者であるが、『日本アジア協会』のメンバーではない人々を指す。『菊』の寄稿者をリストアップし、『キリスト教人名辞典』(日本基督教出版局, 1986年)や土肥昭夫の『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社, 1980年, 12-14頁)に記載されている宣教師リストと比較検討した。
- 15 *The Chrysanthemum and Phoenix A Monthly Magazine for Japan and the Far East, Volume III*, Yokohama: Kelly & Co, 1883, 同志社大学図書館所蔵。
- 16 『菊』1881年2月号, 3月号。
- 17 『和英語林集成』第二版, 明治学院大学図書館デジタルアーカイブス。
- 18 『菊』1881年10月号, 392-397頁。
- 19 『福沢諭吉全集』第19巻, 710-712頁。『福沢諭吉全集』第19巻の中に掲載されている「宗教の説」は, 明治十六年刊の山田芳景編「日本大家宗教演説五百題」所収のもので, 演説が行われた時期は明記されておらず, 「三田演説会の記録に明治十四年五, 六月頃, 福沢が宗教に関する演説を数回行っている。或はそのときの傍聴筆記かと思われる」と注がついている。ハリスは「宗教の説」の翻訳文中で「昨年夏」に東京の三田で行われた演説として記録しており, 同演説が行われた時期は1881(明治14)年5, 6月ではなく, 1880(明治13)年夏頃であったことが分かる。
- 20 李栄「民権から国権へ: ナショナリティの束縛」『国際公共政策研究』15(2),

- 71頁。
- 21 『菊』1881年, 10月号。ハリスは『耶蘇教国害論』(CHRISTIANITY A NATIONAL INJURY)について次のように記述している。Delivered recently in Kiotto, at a large Buddhist meeting held for the opposing of Christianity.
- 22 Notto R. Thelle, *Buddhism and Christianity in Japan from Conflict to Dialogue 1854-1899*, 1987, University of Hawaii Press, 87P.
- 23 小林志保・栗山義久「解説 排耶書『護国新論』, 『耶蘇教の無道理』にみる真宗本願寺派の排耶運動」南山大学図書館紀要第7号, 2001年, 19-30項。
- 24 森岡清美『日本の近代社会とキリスト教』評論社, 1976年, 242-244頁。
- 25 斎藤吾一郎編『耶蘇教国害論』1881年, 国立国会図書館デジタルコレクション。
- 26 都倉武之「明治十三年・三河国明大寺村天主教徒自葬事件」『近代日本研究』Vol.18, 2001年, 117頁。
- 27 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社, 1980) 11頁。中村敏『日本基督教宣教史』2009年, いのちのことば社, 159頁。
- 28 星野靖二『近代日本の宗教概念 宗教者の言葉と近代』有志舎, 2012年, 72頁。
- 29 *Buddhism and Christianity in Japan from Conflict to Dialogue 1854-1899*, 90P, 前掲『日本の近代社会とキリスト教』197-200頁。
- 30 前掲『日本の近代社会とキリスト教』197-200頁。
- 31 Compiled by Wilbur M. Smith, *Great Sermons on the Birth of Christ*, W.A. Wilde co., Natick, Mass, 1963, 120P, <http://www.ccel.us/greatsermons.toc.html>
- 32 クリストリーブ著, ハリス訳述『耶蘇教奇跡論』十字屋, 1882年。
- 33 Christlieb, Theodor. *Modern doubt and Christian belief: a series of apologetic lectures addressed to earnest seekers after truth*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1895. Wilbur M. Smith は, 前掲*Great Sermons on the Birth of Christ*の中で, ドイツ語の初版は1870年に発行されたとするが, Christliebの同著書の序文には, 1870年にドイツ語の2版が出版されたと記録している。なお, クリストリーブは1868年から21年間, ドイツのボン大学で牧会神学(Pastoral Theology)の教授として活動した。
- 34 *Modern doubt and Christian belief*, preface.
- 35 *Modern doubt and Christian belief*, 285-339P.
- 36 註32に同じ。

- 37 米国神学/法律博士ダニエル・デー・ホイデン著, 米国宣教師エム・シー・ハリス選訳『馬太伝福音書義解』美以美雑書会社, 1887年, 青山学院大学青山学院資料センター所蔵。

すでに、アメリカンボードや正教会では、下記で列挙したマタイ伝の注釈書を出版されていた。

『馬太伝の註解』米国派遣伝教師事務局, 1879(明治12)年。

『馬太福音書註解』上, 密哈伊(Michael)著, 白極密哈伊訳 正教会1882年。

『馬太福音書註解』下, 密哈伊(Michael)著, 白極密哈伊訳 正教会1883年。

- 38 米国宣教師ハリス氏口授, 日本牧師南小柿洲吾・山田虎之助校閲, 河村天授纂輯『新約全書約翰黙示録註釈』第1-5号, 信愛堂, 1887年, 国立国会図書館デジタルコレクション。

同 『新約全書約翰黙示録註釈』第1号の凡例の次項に以下の記述がある。

「本書の首端に編載すべき者三款あり即ち総論及分析読者の注意等大凡八十ページなり今回の紙葉限あるを以て本書全刷の節追載すべし」。なお, 総ページ数については各号奥付に「紙数八百ページ余」と記載あり。